高津区おはなしアーカイブ

●小川　八重次（おがわ　やえじ）さん

昭和２年生まれ　８９歳
川崎市高津区久本在住

◆７人の異母兄弟で育つ

私は久本の農家に生まれました。

先妻の子が姉と兄が３人、私は後妻の子です。下に妹と弟がいて全部で７人の異母兄弟で育ちました。

母は嫁ぐ前は石川島浜工場の社長宅付きの女中奉公の筆頭をしていました。小川家の先妻が、子ども４人を残して先立ち、母は父に「小川家に後妻として入りなさい」と言われ、決断したと言ってました。３２歳の時だったそうです。

◆物納の時代

生まれた家は、今の洗足学園正門向かいのハンコ屋さんから山に登る道の角にありました。今の場所（久本３丁目：川崎市立中央支援学校近く）には昭和２９年９月に田んぼを埋めて家を建てて移りました。当時、まわりは田んぼで南武線が見えました。

私の家は久本に広く田んぼを持っていて１町２、３反は持っていたと思います。家は茅葺屋根で、久本で最後まで茅葺屋根の家でした。茅は、今の宮前区で４反くらい作っていました。

田んぼは、小作人さんに貸していました。当時は土地の賃料は、収穫した米や麦など、物納の時代だったんですね。現金よりも米・麦が大切な時代だったんです。

毎年暮れになると、大きな手車に３、４俵のお米や麦を小作人さんが積んで持ってきてくれたんです。母が、１２月になると糀を買いお米を炊いて大きな釜で“どっぷんどっぷん”と甘酒を作って、米俵を持ってきた小作人さん達にふるまうのが習わしでした。おやじが小作人さんたちに「今年はどうだった？」と聞くのですが、小作人さんたちは「今年はよかった」とは決して言いませんでしたよ。賃料を上げられると困りますからね。おやじといえば、昔はわらやとうもろこしの軸を薪代わりにして燃やしていたんですが、父がかまどのところでキセルで煙草を吸っていた姿を思い出します。

◆家ではわら草履

義理の姉、兄たちは年が離れていたため面倒見がよかったので、私は毎日自由に遊べて楽しかったです。

子どもの頃は、みな着物に下駄で、家に帰ると、わら草履に履き替えていました。軽くてとても良かったです。小学校３年生くらいから洋服を来て靴を履くよ

うになりました。

小学校は今の高津小学校に通いましたが、１クラスに４０人から５０人はいましたね。運動会は白足袋を履いてやりました。友達同士の喧嘩もよくあり、当時は力で組み伏せて「勘弁」と言った方が負けで終わったものです。ただ、先生に見つかると大変でした。特に、運が悪い場合は竹の根のゴツゴツしたムチで叩かれました。大人数で喧嘩した時は、２列に並ばされ、相互に向かい合って頬を叩き合うことになりました。仲間だからと力を抜くと、見本で先生が誰かを強く叩いてみせ、全員やり直しです。その時は皆目を瞑ってやったものでした。

◆神社の前では最敬礼

小学校へは、上級生が下級生の面倒をみて集団登校をしました。神社の清掃をし、神社前を通る時は最敬礼して学校に行きました。

町内の結束は強くて協力心がありました。

◆月の明かりで影ふみ

子どもの頃は数えきれないほど、いろいろな遊びをしました。鬼ごっこ、かくれんぼ、めんこ、コマまわし、ベイゴマ、凧あげなど。夜は月の明るさで影ふみもしました。

そのほか、竹馬に乗ったり、空き缶に紐を通して履いて、紐の先を手で持って歩いたり、水鉄砲や、八つ手やサンゴジュの実を紙鉄砲で打ったり、自分たちでも遊び道具を作りました。

仲間はたくさんいて、並んで馬跳びや、宝さがしなどいろいろな遊びをしました。

◆塩浜からあさりの行商

子どもの頃、久本にある家は５０軒ぐらいで、ほとんどが農家でした。お店は醤油屋が２軒、米屋が２軒、下駄作りの家が４軒、なんでも売っている店が１軒で、私が５歳くらいの頃には、１銭でザラメが付いた鉄砲玉の飴が５個くらい買えましたが、年々、物価の上昇で少なくなりました。

山や畑に色々な食べ物が熟すと、仲間３、４人で取りにいくのが楽しみでした。見つかって叱られて、逃げるのがとても楽しかったものです。

当時は塩浜から、とれたてのあさりやはまぐりの行商がきました。「あさり～、あさり～」という声が聞こえると、よく追いかけて行ったものです。魚もその時期にとれたものを持ってきて売ってくれました。

食事は白米が主でしたが、時々母が、麦を混ぜて炊いて、とろろをかけ「とろろ飯」を食べました。あさりのみそ汁や塩鮭、魚の干物、野菜の煮物、天ぷら、豆腐、漬物などを食べていました。

◆しだいに戦火の波が

昭和１２年頃、久本全域と坂戸の一部が軍需工場を作るために国に買い取られたため、農業ができなくなり大変でした。だんだんに戦火の波がやってきていたのです。その後、池貝鉄工所、三豊製作所、日本光学、東京衡機などが続々と入ってきて、道路は従業員の通行でいっぱいで

した。

◆昭和１７年日本光学に入社

小学校は６年、それから高等小学校に２年行きました。銃剣術の教練もしました。軍事教育の波がきていたんです。

今のパークシティのあたりに日本光学の川崎第４工場ができ、私は昭和１７年にここに入社しました。この工場では主に陸軍関係の軍事機器を製造していて、私は爆撃照準機の仕上げ工として働きました。

入社してからは、午前中は技能養成所で技能教習を受け、午後は会社の青年学校で勉強でした。国語、修身、数学、物理、化学、仕上げ工作、機械工作、光工学など１０科目くらいあり１時から５時までみっちりでした。ただ、段々と戦争が激しくなるにつれ、半日は軍事教練をやるようになりました。私は５７名くらいいた仕上げ工の中で年下だったけれど、腕が良かったので難しい仕事に就いていました。

この頃は、家に帰ると、身体が弱く床に伏していた父の看病と母の仕事を助ける状況が続いていました。

◆屋根から見た真っ赤な空

戦火が激しくなるにつれ、成人男性は多くが戦地に行き、女、子どもだけで暮らす家が多くなりました。そのため、久本青年団員は女性ばかりでした。

空襲の際、私が屋根に上り、敵機の方向を見て「飛行機が〇〇へ飛んでいくぞ」と周りに知らせると、こちらには来ないと皆安心するんです。当時、津田山に高射砲陣地があって、打つと音が「ストーン、ストーン」と耳をつんざくような音がして、それを屋根の上から見て「こっちには来ないから大丈夫ですよ」と伝えていました。爆撃を受けた飛行機の破片が落ちてくることもありましたが、怖いとは思わなかったです。死んでもいいと思っていましたから。そういう教育を受けた時代でした。

皆が若い私を頼りにしていたので、責任をもって監視員を務めていました。そんな状況ですから満足な防空壕も作れず、私自身は防空壕に入った記憶はないのです。昭和１９年頃は空襲が多く、夜になると駅前広場は人でいっぱいでした。

Ｂ２９の爆撃が盛んになり、東京の夜が真っ赤に染まる、それは凄まじかったです。

照空燈でＢ２９が光の帯で白く輝いて飛んでいくのは恐ろしいものでした。反撃に高射砲で光の中を盛んに撃つ様子や爆発時の赤い光は多く見ましたが、低くて届かない。相手は１万メートル上空を飛び、こちらは射程７０００メートルなので撃墜できないそうで…。最初の頃は戦闘機の働きで撃ち落としていたのでしょうか、暗い空に火をふいて飛ぶのも見ましたが、真っ赤な空になって、めらめらと燃え盛り飛行する様子は今でも目に染みついています。

◆終戦の年、５月に父が他界

兄３人は兵役で軍隊に行き、家は両親と私と弟、妹の５人暮らしでした。私が１８歳で、来年が徴兵検査という時に終戦になりました。

志願して兵役に行った友人もいましたが、父が病気で、兄３人が兵役に行っており、母に「これ以上天子さまに捧げることはできない。お前は家にいるんだ」と袖をひかれ言われました。

父は病弱で仕事はほとんどできず、昭和２０年５月２５日、横浜大空襲の直前に亡くなりました。母はひとりで畑をやりながら家族を支えていましたが、収穫できる作物は少なく、食料は配給で量が少なく、栄養失調で大変でした。

終戦は喜びでした。戦地に身内が行く度に「天子さまに捧げた命」と言い聞かせていたけれど、戦争が終わり、そこがパッと変わり「良かった」と思いました。

◆食料難を乗り切るために農家に

終戦で私は日本光学を退学退社となり、戦地から戻った兄から言われ、家で農業を始めました。田んぼは農地解放でとられ、４反５畝の畑が唯一の食糧の糧でした。食糧難が続き、止むを得ず１０年ほど農家として働きました。

ナス、きゅうり、トマトなどを作りました。溝口に市場があり、リヤカーで持っていきました。三軒茶屋、中里の市場にも行きました。途中、瀬田坂を上がるのが大変で、自転車にリヤカーをつけ「うんこら、うんこら」と運びました。兄のお嫁さんは下小田中の御大家の出で、嫁入りの時は「農作業はやらない」ことが約束だったようですが、食糧難で、そんなことを言っている状況ではなく、草取りを手伝ってくれました。

私は苗床で温度管理をして野菜の苗づくりからしました。その年の気候を読んで、早めに作って出荷すると、市場で３０％～５０％は高く買ってもらえました。市場に並ぶと「これは地場のものではないでしょう、静岡から持ってきた？」とか言われたほどです。

母は小遣い稼ぎに養鶏をやっていました。ひよこを買ってきて鉄板に砂をひき、豆炭で暖めて育てていました。暑くなると南京袋で作ったカーテンからひよこが出たり入ったり、夜も温度管理が大変でした。私はものづくりも好きでしたが、こういうことも好きでした。

◆角灯篭が光り、祭りが始まる

祭りの時は幟が立って、旗差し物の竿の先端には榊がついていました。子どもの頃には神輿はなく、戦後になって樽神輿を作って神社に置いた時もありました。

毎年、祭りにはお店が出て子どもが集まりました。戦後３、４年だったでしょうか、前夜祭には旅芸人が来て、子どもと多くの若者たちで見ましたね。祭りの前から角灯篭が３m位の間をおいて、神社の道に沿って立られていました。張り紙には色々な諺を表す絵が描かれていました。灯篭に光が入ると祭らしく感じましたよ。お小遣いをもらえるのが一番の楽しみでした。

久本神社は子どもの頃は、小さくて古

くて戸が壊れている状態だったので、他の地区の方からよく馬鹿にされたものです。今は立派な神社になり、時の流れを感じます。

◆１年に１度の「押し待ち」

町内は３組に分かれており、私たちは下の組で､葬儀と夜の念仏の担当でした。事あるごとに組員が交代制で務めていました｡夜､組員全員が我が家に集まって、大きなじゅず玉の輪をまわしたものです。

また、１年に１度「押し待ち」という集まりが小川家であり、天ぷら付きのそばをみんなに出していたことを覚えています。戦後はなくなりましたが。

◆親の袖にすがっておねだり

昔、高津駅までの片側路面に毎月１日と１５日に縁日が出ていました。子どもが喜ぶものを並べたお店で、時々親の袖にすがって欲しい物ねだりをしたものです。

千年の影向寺のお祭りにもお店が出ていて、親に連れていってもらいました。

◆３１歳で結婚し、会社勤めに

戦後１０年、食料もだいぶまわるようになり「八重次、そろそろ勤めて身を固めなくては」と母に言われ、３１歳で結婚しました。当時は就職先を探すのがとても大変で、ようやく見つけた小さな会社で働き始めましたが、給料が少なく、いくつかの会社を転々としましたが、なかなか給料は上がらず苦労しました。３年後には長男が生まれ、生活は大変でした。

戦後農家をやっていたために、いい職場に入れなかったと思っています。いくら働いても、能力があって２人分の仕事をこなしても給料はそこまで上がらない…そういう中で定年まで働き続けました。

最後はＮＥＣでもトップの子会社に成長している日本航空電子工業株式会社のプレス部門の一番の長で定年退職しました。

私は職場でいろいろな苦労を重ね、会社にわが身を捧げてきたので定年が待ち遠しかったです。だから、定年後も会社に残ってくれと頼まれましたが、断りました。

定年後はいろいろな地域活動に長期にわたって関わりました。その中で町会の役員として美化推進委員を２５年続け、２０年目に環境庁長官から表彰されたことが心に残っています。

今は、趣味で家に窯を持ち陶芸教室もやっています。

（平成２９年１０月２０日取材）